

□ 医療機関における防災に関する研究

荒木病院消防委員会

1. はじめに

私たち荒木病院は、加賀平野が広がる石川県小松市に在する産婦人科の病院です。

歓進帳で有名な「安宅の関所」や、子供歌舞伎でおなじみの「お旅祭り」などが有名です。

職員数 50 名、ベット数 39 床で、一見ホテルを思わせるようなホスピタルで、毎日、未来ある命が誕生し、とても活気溢れる病院です。病院には、小松市指定文化財に選ばれた由緒ある庭園があり、四季折々に「マタニティコンサート」などで患者様にご覧頂いております。

産婦人科ということで職員も女性がほとんどで、男性は数えるばかり。それ故に今まで消防・防災には知識もなくまた、関心もありませんでした。毎年行われる消防署立ち会いの避難訓練でも、ほとんど練習したことがなく、ぶっつけ本番です。当然、評価はいつも県内最低…!消防署の方から「災害の時、入院患者や赤ちゃんを避難させるのは、あなたたちですよ!助かるはずの人が、助からなくなりますよ!」と厳しいお叱りの言葉を受けた時、私たちは、大切な命を預かって

いる責任をひしひしと感じました。それから平成7年に、院内で消防委員会なるものを結成し、防災に対しての研究と技術の習得を始めました。

2. 初期対応行動計画の作成

まず私たちは、当院を管轄する消防本部に向きました。そこで、医療機関においての防火管理について講義して頂き、夜間災害時の初期対応行動計画(以下避難マニュアル)について学びました。さっそく病院に戻ってから、私たちは当院の避難マニュアルの作成に取りかかりました。これがないために、今まで避難訓練で、何をどう行動すれば良いのか、分からなかったのです。

マニュアル作りには2か月以上かかりました。火災が起った時、消防署への連絡が先なのか、ドクターを呼ぶのが先なのか、こんな初歩的なことで悩みました。夜勤の看護婦3人の行動を絵で書くのが難しく、何度も書き直しました。初めて分かったことですが、今までは、上階の人をただ下まで避難誘導するものだと思っていましたが、重要な

のは、出火区画を形成してそこから全員避難させる。そして出火区画内の名室の戸、防火戸を必ず全部閉める。そこから区画外、区画外へと徐々に避難していく。そういうポイントを初めて知りました。

それから赤ちゃんの避難は、最初は母親と共に、と考えていましたが、別々に避難させた方が良いことも知りました。

こうして出来上がりを消防署に見て頂き、修正し、直してまた提出。このくり返しでした。やっと手さぐりの状態から避難マニュアルが完成しました。これを職員全員で習得するには、やはり避難訓練です。

3. 避難訓練

避難マニュアルが出来るとすぐに、避難訓練の練習を始めました。まず出火場所を設定し、実際に非常ベルを鳴らす。

- ①すばやく出火場所へ直行できるか?
- ②出火場所でのドアの開け方や消火態勢は?
- ③出火場所を正確にナースセンターに連絡できるか?
- ④消防署への通報、院内の全館放送は手際が良いか?
- ⑤避難誘導も自分の分担を把握し、きちんと防火戸を閉めているか?

この5つのポイントに力を注ぎ、厳しくチェックをして悪い所を見直していきました。

昼休みや、仕事が終わった後にそれぞれ毎日毎日、職員が一丸となって練習し、真白だったホースもいつしか真黒になるほどでした。それもこれも、次の消防署立ち会いの避

難訓練で成果を上げるために、そして大切な赤ちゃん、患者様の命を守るためです。本当にがんばりました。

いよいよ本番の避難訓練の日です。実際に職員の1人に担架に乗ってもらうことにしました。非常ベルが鳴る→消火班が現場へ直行→院内放送→現場からの連絡→119番通報→避難誘導と少々ミスはあったものの、全員真剣そのものでした。担架で運ぶことがいかに大変かが、本当に実感できました。私たちの熱心さ、真剣さ、努力が伝わったのか、前回とは180度も違うお誉めの言葉を頂き、本当に涙が出るほどうれしく思いました。

4. 柳行季(ヤナギゴウリ)

産婦人科病院の避難訓練の特徴は、「母親と赤ちゃん」、この二人を避難させなければなりません。特に夜間に火災が発生した場合、職員が手薄になり、生後まもない赤ちゃんを一度に搬送するのは不可能です。最初は母親が、自分の赤ちゃんを抱いて避難した方が良いと考えていましたが、消防署から「母親が一度に育児室の出入口に集まるとパニック状態になる」と注告され、職員で搬送することを考えました。そこで一度に効率よく赤ちゃんを安全確実に搬送できないかと思案したところ、昔は何処の家庭にも一個はあった「柳行李」に注目しました。

柳行李は、コリヤナギの枝の皮をはいで干した物を、麻糸で編んで、衣類や旅行用の荷物を入れるために用いたものです。縦42cm、横75cm、深さ23cm、で赤ちゃんを一度

に5人寝かせることができます(写真1)。

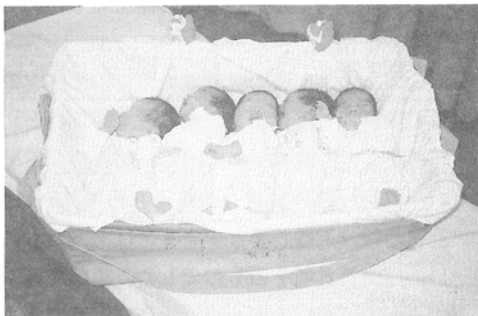


写真1

しかしこれをそのまま利用はできず、改良を加えました。柳行季の両端に強力防水シートで、持ち手と首に掛ける長さ120cmの保持を取り付け、搬送可能にしたものです(写真2)。首に掛けることによって、より安全に、かつ一度に手際良く何人もの赤ちゃんを避難させることができます。

昔からの柳行季を職員の「ひらめき」と「努力」で変身させたアイデアは、全体の良い刺激となりました。



写真2

5. HIS 研究発表会

荒木病院は、全国の有名産婦人科病院が、共通の理念で集まった HIS(Hospital,

InterpersonalService) 研究会に属しています。「あたたかい人間味ある医療」を模索することを目的とし、トータルなサービスをお互いに創造し高めあっています。平成8年の HIS 研究発表会で、私たちは、産婦人科特有である母児の避難誘導について発表しました。母児を別々に避難させる方がより効果的で確実であること、そして赤ちゃんは柳行季に入れて看護婦が避難させることなど、当院が独自の方法を取り入れて行っていることを、スライドを使い発表しました。

スライドでは、看護婦が屋内消火栓のホースを持ち走っている姿や、柳行季に赤ちゃんを並べ避難している姿が写し出され、会場は「オー!」「なるほど!」と驚かれたり、感心されたり大変注目されました。質問も多くいかに、多くの産婦人科病院が赤ちゃんを避難させる方法に悩んでいるかが、目のあたりに感じました。

今回、私たちが発表した、災害時の避難誘導は、安全を確保し安心して療養して頂く意味で「あたたかい医療を求めて」の原点であると評価されました。そして第2位という賞を頂き、職員全員は大喜びで、これからも頑張ろうという気持ちにさせられました。

6. 消火競技大会

小松市では、年1回防火協会主催の初期消

火競技大会が開催されています。荒木病院も「これに出場しよう!」という声が高まり、平成8年から参加しました。

最初は、軽い気持ちで消防署へ出かけましたが、他の病院の方の真剣さに圧倒され、『このままではいけない!』と思いました。

それからというもの、時間を少しでもつくり、消防署へ出かけ一生懸命練習しました。

それぞれの持ち場を納得するまで教わり、病院の駐車場でも何度も練習しました。大会が近付くにつれ、それぞれの息もピッタリ合うようになってきました。

大会当日、うまく行くチームや失敗するチームなどさまざまでした。大会のための繰り返しの練習……それでも失敗する…今は大会だけれど「本当の火災だったら…上私たちはいかに訓練が大切なものかひしひしと感じました。

私たちは、この機会に沢山のことを学び、やり遂げた充実感で一杯です。お陰様で、練習の成果が現われ、我がチームは、平成9年、

参加2年目にして初優勝することができました。

余談ですが、大会直後、出場者の一人が妊娠と分かり、二重のお目でたとなりました。

7. 標語、ポスター作り

病院内で、消防委員会は、全職員、外来、入院の患者の方々に少しでも防災に関心を持ってもらうために、ポスター作りや標語作りに励みそれを院内に貼り出しています。作成されたポスターはそれぞれ、季節コンニチを取り入れ、今日のニュースやトピックスを取り混ぜ工夫を凝らした力作ばかりです。写真をご覧下さい(写真3, 写真4)。

病院にお越しになったお子様も楽しめるようなポスターにしたいと思います。また、防災管理者(甲種)の講習会を受講したり義援金を募ったりと院外活動も、行なっております。

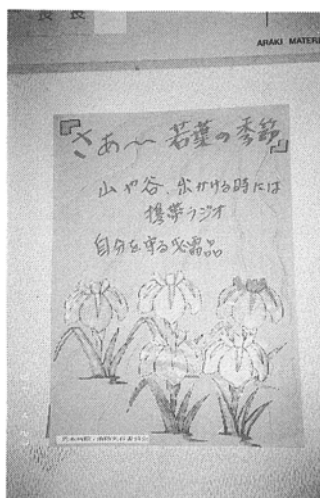


写真3



写真4

8. おわりに

以上平成 7 年からの荒木病院消防委員会の軌跡を紹介しました。県内最低のレベルの評価から、優良防火事業所として県知事賞を受賞するまでには、いろいろな事もあり、本当に消防署の方々、その他の皆様のご協力のお陰だと思っております。

防災の知識も技術も知らなかった私たちが、「あたたかい医療」という医療従事者と

しての本質的な「心」に目ざめ、消防という機関で評価され、成果をなし得た自信は、揺ぎ無いものとなりました。

これからも避難訓練や初期消火大会の充実、ポスター作りや救命講習会の実施、地域へのボランティアなど防災を通して地域に密着し貢献してゆける病院を作りあげてゆきたいと思います。

